

【再考：早期対象関係における‘皮膚’機能をめぐって】 (1986)

～乳幼児観察から発見したものを児童及び成人の分析へと統合させてゆく試み～

Ester Bick

[原題: Further Consideration on the Function of the Skin
in Early Relations — Findings from Infant Observation integrated into
Child and Adult Analysis]

1968年に私は或る小論文を発表し、そこで臨床経験及び乳幼児観察に基づき、赤ちゃん及びそのプライマル(一次的)な対象の‘皮膚’のプライマル(一次的)な機能についての所見を述べました。その‘皮膚なるもの’とは、未だ身体から分化されているとは言えないパーソナリティを一つに纏めるところのプリミティブ(原初的)な‘繋げるもの binding together’であるといった主旨であります(Bick,1968)。その際私は幾つかそれを例証するもの evidence を挙げておきましたが、それらは、最早期のパーソナリティの各部分には生得的に繋ぎ合わせる力が備わっておらず、受け身的にしっかりと抱えられずにいるとバラバラに落ちこちて砕けてしまうと感じられるということを示唆しております。それは身体が皮膚によって抱えられていると感じるとの区別が付かない経験といえましょう。さらには、このコンテインメント機能の防衛の発達が起こる際に、別の‘二次的皮膚 secondary skin’ともいえる心の装置が、母親のケアに特徴的な身体接触もしくはことば掛けなどといったものと連携しながらも生じることが示唆されております。そこでパーソナリティ発達にどのような結果がもたらされたか、特に自我の強度 ego strength、偽・自立性 pseudo-independence、そして非統合 disintegration への傾きといった点に言及し、簡潔ながら幾つか例証を試みたわけであります。

今回この論文を書くにあたり、私はそれら発見されたものをいっそう掘り下げ、新たな考察を試みたいと思っております。ここでまずは前回と同じ子ども、メアリーを取り上げることに致します。その観察資料が当初大いに役に立ってくれたわけですが、今回もまた考察を推し進める上でその更なる詳細を語る事が有益であろうかと思われたのです。彼女は3歳半で私のもとへ分析に通うようになりました。その理由というのは、深刻な発達遅滞が全般的にあったからです。彼女は誕生の当初から躓きがあり、それ以来問題をずうっと引きずっていたこととなります。母親は、なんとか自然分娩をしようと一通りではない難儀を味わった末に、結局帝王切開で子どもを産んだということであります。最初の週、メアリーはその口に咥えた乳首をぎゅっと締め付けて離さず、乳首を取り除くことは実に難しかったということでした。そして2週目には母親のお乳が殆ど出なくなります。それからメアリーはお乳への食いつきが悪くなり、グズグズするばかりでいっこうにお乳を飲もうと致しません。しかしいつもオッパイを欲しがって泣きますので、事実上彼女が11ヶ月目になるまで断乳させることは無理でありました。彼女は当初から母親との分離には極めて耐性がなく、ひどく焦れて泣き叫ぶものですから、母親は彼女を置いて夜外出するのは控えねばならなかったということです。それに、彼女が4ヵ月半の頃湿疹が出るようになりました。そのため、母子分離の事態は尚のこといっそう悪化してゆきました。就寝中からだを掻きむしり、皮膚から

血が滲み出るほどであり、そこで母親はメアリーと一緒に寝かせてあげ、彼女の手を掴んでやったのであります。それが唯一彼女の掻きむしりを止めさせ、かつ落ち着かせる方法であったからです。

分析の始まりにおいて、彼女の言語面やら、トイレの躰け、そして動作性の遅滞はかなり顕著でありました。彼女は母親の手を借りて‘おまる’に座らせてもらうやら、いつも鼻水を垂らしていたのですがそれも拭いてもらったりしており、また靴紐をも結んでもらっていたわけですが、それは後に彼女が言うところでは<漏れちゃう spilling out からの…>ということでした。しかしながら分析の最初の3ヶ月の間に、生き活きとした表情とか、話し方、そして情動的な接触面など一般的にとでも喜ばしい変化もたらされてゆきました。彼女の両親が私に語ったところでは、彼女は毎回私のところに訪れるのがとても待ち遠しく、私を<Bicki>とか<Choki Biki>と呼んでいたようです。毎回のセッションの終わりでは、彼女はすぐには立ち上がることが出来ず、恰も椅子にくっついてしまったみたいで、それでどうにか自らを引き剥がねばならないといったふうなものでした。後に分析のなかで彼女は、<もし立ち上がったりしたら、漏れ出してしまうんだもの…>と語っております。徐々に扉の方へと進んでゆき、そして扉のノブに片方の手を掛け、それを何度も回し続けます。それからやつのことで扉を開きます。それを手でバンバンと打ちつけ、それから微笑を浮かべて、<さよなら…>と言うのでした。かつて彼女は乳首を求めることに執拗で、ガッチリと啣えたままなかなか離せなかったわけですが、そうした彼女のしがみつがここに繰り返されているように私には思われました。事実母親とナースたちからは、彼女が乳首を1、5インチほど引っ張ってもなお口から離すまいとしていたとの証言があります。

メアリーはしばしば私の与えた解釈の言葉を鸚鵡返しに繰り返すことがありました。例えば、<それってパパみたいな誰か男の人だと私は思うわ>とか。敢えて私と同一化して自らを失うために投影同一化を援用しているのだろうかとはまず考えたわけです。しかしクリスマス休暇でセッションのお休みがあった際、劇的な変化もたらされ、そこで私は私の考えを変えざるをえなくなり、彼女が今やセッション中に持ち込んでくる現象の謎めいた多様性について大いに思案するに至ったわけでありました。彼女は休み明けのセッションに戻ってきますと、玩具類を次々と破壊し始めました。歯をギリギリとくいしばり、それらを拾っては投げ、投げては拾いを繰り返す、さらに引き裂いたりして踏んづけたりグジャグジャにしてゆくのであります。ここで私は、彼女がかつて血が滲んでくるまで皮膚を執拗に掻きむしった、つまりは内ものが外へと‘漏れ出る’というわけですが、そうした彼女の過去を思い出さずにはいられませんでした。こうした行為は、彼女が私の方へ目掛けて投げたものを私に拾うようにと告げたときに変わりました。徐々にそれら‘破壊工作’はボール遊びに取って代われ、そこでは彼女は私の動きを完全に支配しておりました。私は或る位置に居なくてはならず、彼女がボールを私へと投げて寄越したときだけ、それを胸に抱きかかえていとされました。彼女はそれからそれを取り戻し、そして私とは反対の位置に立ち、そしてボールを再び私に投げ返すのでした。このプロセスは、セッションの終わり近くまで続きました。それからそれとは別の遊び、プリキ缶をクルクル回すという遊びへと移り、彼女は興奮した面持ちで両手を揺すりながら、それを眺めておりました。まるでそのクルクル回る空き缶の動きとリズムに彼女のパタパタと腕を動かす動きを身体的に同調させているかのようでありました。

それから私は、私の使った言葉を鸚鵡返しに彼女が繰り返すといった同一化 identification の性質について改めて考察を深めてゆきました。そして、今ここでまさに彼女の成育歴が繰り返されていて、その断片的な形態の極めて複雑なプロセスを見ているのだということに気づかされたわけです。空き缶は言うなれば‘乳首’であります。まさに遠心力の働きのように、彼女はそれに引っ付いてしまった格好となり、乳首を離そうにも離せないでいるといったふうに解釈しました。彼女のからだは椅子にへばりつき、彼女の手が扉のノブにくっついたみたいに・・。すなわち彼女は母親の腕の中で、そして母親に絶えず側に居てもらうことで、抱えられることが必要だったというわけなのです。母親と別々にされるということは、まさに‘迫害的な手 persecuting hands’によって切り裂かれるということであり、バラバラにされることなのであります。その‘迫害的な手’とは、玩具類をメチャメチャに破壊し、またかつて彼女が自分の皮膚を血が出るまで掻きむしった、まさにそうした手そのものなのであります。心もからだもズダズダに引き裂かれる分離に直面して、それで内なるいのちが溶解し漏れ出してしまうように感じられ、生き永らえるために必死になってしがみつこうとしますがますますエスカレートしていったということになります。従って、同一化およびその結果として私の言葉をそのままに模倣するのは私の表面に彼女がくっつくためであったように思われたのです。そこで私は、それが「投影的 projective」というよりむしろ「付着的な adhesive」同一化であると考えに至ったわけなのであります。

それからしばらく後になって、私は、6歳半のソニヤの治療をスーパーヴァイズすることがありまして、そこからさらに、付着的な類いの、関係性から離れることの困難性というものについて学んだのであります。それは或る繊細な感受性を持つ若い男性セラピストの担当するケースでありましたが、母性的転移 maternal transference の解釈は十分に施されております。この子どもは3人同胞のうちの末っ子でありましたが、かなり手間取った難産の末に誕生し、4ヶ月ほど母乳を与えられました。15ヶ月目に彼女は熱病の水ぼうそうを患い、痙攣発作を起こしました。そして20ヶ月目に目の網膜の癌に罹り、眼球の摘出が必要とされました。その結果彼女は片側の眼にガラス製の眼球を嵌めております。癲癇性の傾向があるということが4歳時に認められ、そしてフェノバルビタール(催眠鎮静剤)が投与され抑えられたのであります。分析治療開始時には、彼女は発達全般に障害が認められます。両親からの報告では、彼女は度々家の外へと飛び出し、危険をまるで察知することがないということ、そして彼女には空想上の双子(ロージーという名前なんだそうです)がいるということでありました。学校では、彼女はいつも校長先生やらケアテーカー(管理人)やら、もしくは或る一人のちょっと変わった男の子のところへと駆け寄ってゆくことがあったようです。彼らは彼女を教育不能と見做しました。ソニヤの母親は抑うつに罹っており、時折入院せざるを得ない事態に陥りました。父親のソニヤとの関係性は、セラピストの観察によりますと、‘付着的’といえましょう。待合室で彼女は父親のごく身近に座っていなければならず、彼女がセラピストに連れられて離れてゆく姿を父親はずうっと目で追い、手を振っているとのことでした。彼は心理治療には反対しており、その期限については制限を設けることを主張しておりました。それでセラピストは、半年ごとの間隔でセラピー継続について交渉をしなければなりませんでした。どうやら彼女が学校で2人のケアテーカーらの男性たちに駆け寄ってゆくのは、父親的な存在にしがみつ

必要性から起きているようですし、またその一風変わった男の子について言えば、たぶんそれが彼女の双子の片割れのロージー、彼女と‘そっくりさん’だったからでしょう。後に分析で、彼女には眼が一つしかないということを気にし始めたとき、彼女は、彼女にも似て眼球が一つしかない叔父さんと一緒に暮らしたいという切迫した願望を表しております。

分析の週末を迎える前、ソニヤはとても興味深い「分離の儀式 (separation ritual)」に取り組みます。彼女はまず最初に2つの結ばれたループ(輪)を描き、それからそれらループが繋がった長いものを描いてゆきました。彼女は彼女の双子と一緒に週末をともに過ごすという話をしております。彼女が月曜日にセッションに戻ってきたとき、彼女はループの連なりのパターンにも似たような動きで入室しました。彼女は右手で扉のノブを握り、左手で傍らの壁に触りました。そんなふうに自分のからだを壁に向かってループのかたちを取ったのです。そんなふな恰好で壁を伝え歩きして、家具へと這い上がり移動してゆきました。それからその家具の天辺に立ち、そこから手を伸ばし天井のプラスターを削り取り、それら滓が床に毀れ落ちるのを見て、<隙間 gap を止めるの (That is to stop the gap)>と言いました。月曜日に壁へ向かってループを作るのは「再会の儀式」であったということになりましょう。

ソニヤにとって壁は、しがみつくとことのできる彼女の母親のからだの具体的な表象であるようでした。水道の蛇口のあるシンク(水屋)がまた「分離の儀式」に用いられております。それは母親の膝そして乳首をも表象しているかのようでした。セッションの終わりには必ず彼女はシンクへと向かいます。そこで彼女はそのシンクの上にまたがり、口をその蛇口に押し付け、水を口いっぱいにくませました。彼女はその口にくんだ水を待合室へと向かう最中ずうっとふくんでおり、母親が彼女の視界に姿を現すまで、ずっとそうしたままです。やがて彼女は口の中の水をゴクンと飲み込み、そして眼でもって母親をしっかりと捉えるということをするのであります。彼女が口に水をふくむ回数は、週末そして休暇の分離の期間に比例しておりました。他にもまた、彼女は車輪をくるくる回すことがとても器用だったということが特筆されます。そして縄跳びも、いつもセッションの終わりには必ず彼女はしたわけですが、儀式化しております。これは、彼女がなんらかのギャップに直面したときの、筋肉による多動性の自己コンテインメントの試み *attempts at muscular hyperkinetic self-containment*、即ち「二次的皮膚形成 *second skin formation*」であると、私は考えました。

最初の休暇 *holiday* を間近に控えたセッションで、‘儀式’はいっそう増えてゆく一方でした。その一つはユダヤ人 *Jew* の *J* の文字を書き綴ることでした。ユダヤ人の子どもは二重に休暇が与えられていると彼女は言います。彼女はこの綴りを止めません。しかしながらその文字 *J* の最後に、それを‘行き止まり *the dead end*’と呼んで、ひどく不安げな様子となりました。文字 *J* を幾つも円く描いたところに並行してさらなる綴りを線状に描き続けます。そこで私は、ソニヤがギャップ(隙間)の存在が脅かしになるということ—すなわち墜落死—を考えていたに違いないと結論づけます。ちょうどループ(輪)は何かと何かが対をなす *twinning* ことであり、それは彼女が誰でもいい、側にいてくれる人にくつつきまにも似ているわけです。彼女は同様に、ユダヤ人の子どもたちは‘他の子と同じではない’ということを確認たわ

けですが、それはちょうど彼女がガラス球の眼を持っているがゆえに誰とも同じではないということにも似ております。それに彼女は二重に休暇をも持つというわけなのであります、学校からも、そして分析からも・・・といったわけです。

こうして私は、「付着的同一化 adhesive identification」について、それが行き止まり (the dead-end) への防衛として考えるようになりました。しかし、付着的同一化そして行き止まりを「次元性 dimensionality」との関連において考察するようになって初めて、それがいかに他の迫害的不安 persecutory fears とは異なるものかが見えてきたのであります。

成人の分析患者 Mrs. B は、さらにこれとの関連で私の考えをいっそう明らかにしてくれました。彼女は聴き入ること listening そして考えること thinking が極端に困難な人でありました。彼女は決まって毎回木曜日のセッションには‘バケツ一杯’ほどにも大泣きをするのでした。或る木曜日、彼女はこの世で最悪といえるのは、＜あなたは終末期の病を抱えている＞と告げられることに違いないと申しました。金曜日は彼女の＜終末期の病＞であり、木曜日に何ごとかを耳にするとしたらこの情報であり、それについて否応もなく考えねばならないというわけです。彼女の世界は二次元的であり、いふならば‘平坦 flat-earth’であり、つまり‘行き止まり the dead end’とは虚空への墜落を意味していたのです。もう一人別の患者の Mrs. S もまた、これにも似たような「未知なるものとの関わり」を提示しております。彼女にとって‘答えをもらえない’ということは、「流砂の中に沈んでゆく」といった感覚なのでした。或る木曜日に、彼女は夢を一つ語りました。5匹の小さな子羊がわれわれと一緒に面接室にいたようであり、4番目の子羊が5番目のに、＜金曜日にぼく死んじゅう・・・＞とっております。しかしもしも彼が本を読んでいる分析家に耳を傾けるならば、彼は生き残れるということでありました。これが意味するところは、金曜日にももし私のライフについて、注意深く聞くべきことに聞き入り、そしてしっかりと見るべきものを見るならば、それら収集した知識でもってその終末のギャップ(隙間)を埋めることででき、だからどうにか耐え忍ぶことができるということでありましょう。例えば、私のフラットの玄関口にアイリスが飾ってあり、そして誰か或る同僚が庭でアイリスを育てていて、その彼女が私の仕事について何か褒めていたとしたら、すぐさまそれらを繋げて、彼女は私とその人と一緒に週末を過ごすといったふうに解釈するわけです。彼女の知識のなかにある‘穴’はそこで埋められ、だとしたら彼女は底無し行き止まり the dead-end の流砂に沈み込むこともなくなるというわけであります。

このように Mrs. B および Mrs. S といった分析患者たちの所見から、‘付着的な関係性 adhesive relationship’とは、対象の表面上 on-the-surface にしかないということ、つまり二次元的であることが見てとれます。だがその一方で、あらゆる分離、ならびに不連続性(例えば、対象についての知識がそうであるわけですが)とは‘未知なるところの3次元的なもの the unknown third dimension’であり、すなわち虚空への落下を意味するわけです。Mrs. A から興味深いことを伺いました。子どもの頃、父親は彼女を寝かすことが極端に困難であったと聞かされており、本を読んできかせてやるとまどろみはするのですが、彼が部屋を出るのに扉のノブに触りでもしたら、彼女の小さな眼はぱっちりとして再び

開いてしまうのだったそうです。メアリーの乳首にも似たように、ソニヤは口いっぱい水を含ませたのであります。こうして得た理解は、「行き止まり the dead-end」の果ては虚空へと落下するということであり、ここで改めて母子間の交流の観察という経験へと引き戻されることになりました。そこでここに語られた困難性のそもそもの発端なるものの証拠 evidence がより詳細に見え始めてきたわけなのです。ここから例えば母親の抑うつ感について申しまして、まだぼんやりとしたフォーミュレーションでしかなかったものがより精確な洞察に取って代わられてきたといえましょう。

さてここで、乳幼児観察から例を挙げてみましょう。実際のところ「乳幼児観察」というのは誤った名称かと思われます。なぜなら観察者は産まれた子どもの家族を観察するのでありますから。何年も掛けての観察資料から、家族それぞれ成員にとっての基本的な問題とは、それぞれ程度は異なるにしろアイデンティティ identity の変化であるということが覗われます。母親は、自分の時間やら行動が自分のコントロール下にあるといった自信ある成人としてのアイデンティティが失われたと感じます。その代わり四方八方からの圧倒されるほどの要求で日々振り回されることになるわけです。完璧な母親であらねばならないとか、自分自身を無にしなければならぬといったことや、睡眠ですらも…。これらのフィリングは、そもそも彼女自身の母親の不適切さに対してかつて抱いた彼女自身の幼児期の苦情に深く根差しているともいえましょう。

上の子どもにしても、かつての‘ママの赤ちゃん’という重要なアイデンティティを持っていたわけですが、今やそれを奪われ、もはや自分が誰かを知りません。しばしば赤ちゃんのレベルへと退行し、大いに混乱し、生き残りのために躍起となることでしょう。そうしたあらゆることが母親の罪責感を募らせます。上の子の苦悩を見るに忍びず、それで赤ちゃんに母乳を与えるのを断念する母親もありましょう。父親はこうした時期に、もし彼が上の子のマザリングを引き受けてくれるとしたら、とても大きな支えとなり得ますが、しかししばしば彼は疎外感を感じていて、自分の出番など無いと思いがちであります。

多くの事例において、観察者は‘共感的な聞き役’という役割に徹していれば、何かしら助けになるようであります。なぜならどんな母親にしても心の重荷を下ろすことを願っているからでしょう。助言は彼女に対してむしろさらなる要求を意味することになりかねません。新生児を迎えたばかりの家族に対して観察者であることは、強烈なフィリングに身を晒すことになり、それで殊に赤ちゃんの苦悩に同一化し、その結果母親に対して批判的になりがちであります。そうした例として、観察者が特に心乱されることの著しい状況が2つほど認められます。一つは、母親が赤ちゃんから乳首を取り上げて、ゲップをさせるとき、そしてそれをとても頻繁にする場合です。もう一つは、彼女が赤ちゃんを入浴させるときであります。彼女自身が赤ちゃんを落とすのではないかとビクビクしているように見えるのです。

実は私はこの件で或る小児科医と話し合う機会がありました。その方がおっしゃるには、赤ちゃんの入浴はそうした早期の段階では絶対不可欠というわけではなく、母親は単に赤ちゃんのからだを拭いてやるだけでも充分だと言いました。しかしゲップに関していえば、誕生後の‘適応’の問題があります。

胎内では重力という感覚はないからだとその方は説明されました。つまりは、赤ちゃんは産まれたとき、宇宙飛行士が宇宙へと宇宙服を着ないまま飛び出したみたいな状況にあるというわけです。

ここに3週間目の赤ちゃんの観察記録をご覧に入れましょう。或る直観力の秀でた観察者による観察であります。その抜粋を引用させていただきました。

赤ちゃんがゲップをする前、その顔、からだ、手がまるで開いたり閉じたり、からだが強張ったり弛緩したり、顔は引きつったりリラックスしたりするのが観察されました。母親はそれから、彼を膝の上に横抱きに抱っこしましたので、彼の足は彼女のお腹に向けられます。母親の膝の上にお座りした恰好で、彼は手と足をバタバタさせます。それは恰も重力の無いところに居る宇宙飛行士のようでありました。彼女はそれに反応し、彼に再び優しく話し掛け、そして彼の両腕に手を添えて、お腹の方へと下げてやります。それから彼を着替え用のパッドの上に横に寝かせます、<いつもどうやら着替えが好きじゃないみたいなの>と言いながら。。

こうして観察者は、赤ちゃんとの同一化をとおして、赤ちゃんにとって何よりも恐怖となるのは、落下してバラバラに砕けてしまうこと、もしくは液化して溶解するといったことだと直観したのであります。このことは赤ちゃんが乳首を口から取り上げられるとき小刻みに身震いするさまに覗われますが、着てる服を脱がせられたりするときもそうなのであります。

ここでもう一つ乳幼児観察の事例を参考にしてみましょう。これは若いご夫婦の初めての赤ちゃんであります。観察者が、赤ちゃんが産まれる前に、時間の取り決めのために訪れたとき、母親は新しい服を買わなくてはということで頭がいっぱいでした。彼女はそれをクリスマス・パーティに間に合うようにと思っていたのです。そうでなければとても格好悪くて見られたものではないというわけです。この‘恰好悪い unfit to be seen’というのが彼女のアイデンティティを巡っての恐怖の最初のサインでありました。次に彼女は、赤ちゃんはすぐにもお座りするだろうから、赤ちゃん用の椅子を探して買っておかななくてはと言います。もう一つ、彼女は両親が赤ちゃんに障害がありはしないか、或いは死んではいないかと案じて見にやってくるということに不安を覚えておりました。もしそんなことでもあったら、彼女の落ち度として責められるからであります。彼女は夫が出産に立ち会ってくれるかどうか疑念を抱いてもいました。なぜなら彼にしてみれば出産をどうやら汚らしいもの messy と考えていまして、汚らしい子どもは嫌いなのですから。事実父親はとても疎外されていると感じているようで、週末は殊に厄介でした。母親は赤ちゃんに迫害されている persecuted と感じていたわけですし、父親にしてもそうでした。なぜなら赤ちゃんは‘彼らを全然放っておいてくれない’からなのです。赤ちゃんが夕食前に泣き出しますと、父親はくいやだなあ、ぼく、一人でまた食べなきゃなんないわけ！>と言うといった具合なのでした。

赤ちゃん用の椅子ということと言いますと、赤ちゃんを座らせてやる‘お膝’の用意がないといった母親自身の気持ちを物語っております。椅子の購入に彼女が躍起になっていたのは、それよりもっと動揺

をきたすところのもの前兆に過ぎませんでした。事実、彼女は赤ちゃんを少しでも時間を掛けて抱っこしてあげることが出来ませんでした。そして彼に哺乳瓶を与えていながらも、その体の向きが彼女とは向き合っておりませんでした。観察者が最初に訪れたのは赤ちゃんが17日目でしたが、彼女はすぐさま赤ちゃんを観察者に手渡し、〈赤ちゃんをあやしてやって頂戴〉と言います。すなわち‘椅子’代わりといったわけであります。この赤ちゃんの観察の詳細は、なんとも不安を煽るものでしたが、それ自体はとても興味深いものでした。彼は絶えず頭を左から右へ、そして右から左へと揺すり、また両手を頻りに動かしておりました。下半身はまったくのところ何ら動きはありません。そして或る時点で赤ちゃんは片方の手をなんとか持ち上げ、それからそれにもう片方の手で支える恰好にして沿わせました。それから両方とも持ち上げ、指先が顔に触れ、それに支える恰好をします。それ以上の頭の動きは見られません。つまり彼自身が自分で自分を支えていたことになります。母親がこの時点で彼を抱き上げます。なぜなら彼は一見して眠たそうだったからです。そしてそろそろ彼を寝かせられると思ったようです。すると彼は彼女の髪の毛を手の内に握り、顔を彼女の首の辺りへと近付かせます。母親はこれには感動した面持ちで答え、〈ママの事、抱っこしてくれてるわけなの？〉と呟きました。

これは本当のところ、赤ちゃん自身の‘抱っこされたいニーズ’がどんなに強いかということを示しているわけですが、同時に母親にしても‘抱っこされたい’（マザリング）のニーズ‘がどんなに強いかということも…。ここで赤ちゃんが自分の顔に触ろうとして両手を協応させた動きは、生き延びようとする彼なりのすごい頑張りだと私には思えました。母親は普段はこの子を一人置きっ放しにしております（そのように観察者に語っております）。3時間ほど一人で寝かせておくんだそうですが、彼はちょっとぐずるぐらいなんだとか。それで彼が少し声を上げて泣きましたら、彼女は彼のところへ近寄って、ちょっと触れてやるんだそうです。するとすぐに彼は寝入り、あと1時間ほどはそのままだそうです。この赤ちゃんはちょっと触ってもらう程度にしか母親を求めず、それで十分というわけで寝入るということのようでもあります。入浴時に着ていた服を脱がせられますと、彼はすぐに身を震わせ、寒そうにからだを引きつらせませす。たぶん彼は寒いのではないかと思われるわけですが、なぜなら服を脱がせられて何も身に付けてはいないのですから。しかし母親が彼に触れ、湿ったコットンでからだを拭いてやりますと、赤ちゃんの体の震えはおさまるのでした。私には、この触ってあげること touching にはそれ自体何らかの力が備わっていること、つまり母親にくっついていられてるというフィーリングが戻ってきたといった、‘付着 adhesion’の意味づけがもたらされるものと思われました。

この赤ちゃんは、われわれが観察した他のどの赤ちゃんにも似て、母親に抱っこされていないときには別の方法でしがみつきをするのが時々覗われます。持続的な感覚的刺戟（例えば光）、もしくは絶え間ない音（例えば洗濯機など）に気持ちを焦点づけるのであります。それにしがみつき、目でそれにピタッとくつき、耳でその感触を掴んで離さないといった具合です。器官が、乳首にしがみつく口のように、吸盤の役割を担っているのです。この発達早期の段階では、それぞれの器官には別々の機能の分化はありません。それらはすべて付着のための吸盤としてあるということになります。「しがみつくニーズ」というのは母親にもまた同様に該当することがありましよう。或る母親が或る晩、赤ちゃんが泣いたとき、

夫の眠りの妨げにならないようにと隣の部屋へ避難したんだそうです。そのとき窓の外に郵便局のタワーの灯りが見え、ふくろうの鳴き声を耳にしたことでどんなにか心慰められたかということを語っております。彼女もまた気持ちがざわついて落ち着かないとき、身の回りで実際に起きていることとは別の何か、眼と耳で焦点づけられる感覚的な何かにしがみつこうとしていたことになりましょう。この母親もまた、恰も‘宇宙服’を身に付けていないような心もとない気分だったのかも知れません。

赤ちゃんへと話を戻しましょう。既に3歳半になっておりますから、この赤ちゃんの発達は多くの面で不十分といえましょう。それは二次元的な関係性を示唆しており、これから新しい特徴が幾つか付け加えられるとしても、複雑性においては大して変わりませんでしょう。例えば彼は、頭を母親へと向け、それから観察者の方へ向けるといったふうに、それを代わる代わるやるゲームを始めました。彼らの注目を得ようとしているのは明らかで、それに彼らが応えてやりますと、彼らの発する音を真似することもし始めたのであります。しかし彼は口へモノを咥えようとしませんし、手で握ることもいたしません。例えば、母親が彼を寝かしつけるとき、やわらかいぬいぐるみのウサギちゃんを彼の傍らに置いてやるというのがいつもの習慣となっておりましたが、彼はそれの手の甲で触れて動かしてはみるものの、それは結構器用にできるのですが、でもそれを手で掴もうとはしません。

ここでソニヤのループ(輪)と荷車の車輪におそらく繋がりがあろうかと思われる例を参照することにししましょう。赤ちゃんBの母親は、温もりのある繊細な関係性を子どもとの間に持てる人のようでした。授乳の時間になって抱っこされたとき、彼にはオッパイに向けて腕をまるく輪(ループ)を描くように動かす傾向のあるのが認められております。彼は哺乳瓶を与えられておりまして、母親は右利きでしたので、その左腕に横抱きにされた赤ちゃんは左手だけが自在に動くわけです。或る日のこと、彼が床にお座りをしていたとき、母親が彼の左側の辺りにオモチャを置いてやりました。すると彼は両方の手を前に突き出した恰好のまま、どんどん焦れて半狂乱になってゆきます。その後もこのパターンはオモチャが左側に置かれた場合に繰り返され観察されております。もしも右側に置かれたときですと、彼はその左腕を完全な輪を描くようにして回し(ルーピング)、オモチャをその伸ばした手で掴むことができたのです。こうしたスキルが、彼が哺乳瓶を与えられているとき母親のオッパイへ向けてのループ(輪)を描くしぐさと関連しているのは一目瞭然であります。

この例は、母親の身体へ向けての方向づけ(オリエンテーション)が、赤ちゃんにとってその対象を把握し、かつそれらを探索することができるようになるためにどれほど重要かということを示唆しております。すなわち、こうした能力は触るやらしがみつくといい母親との‘付着的接触’といったプライマル(一次的)な関係性に基いているわけでありまして。赤ちゃんBの場合、こうした関係づけがからだの右側に、そして左手にあったこととなります。それで対象が左側に在りますと、混乱してしまいパニックが生じるのです。赤ちゃんAは、これと比較しますと、この対象を掌握する方向づけ(オリエンテーション)が欠如しているようであります。成人の分析患者にしても同様に、アイデアを把握する上で困難性を示すことがあります。Mrs. Sは或る日のこと、私をそして彼女自身をもびっくりさせました。というのは、彼女の経験

を物語る上で彼女自らの言葉を使ったからです。いつもだとただ私の言葉を繰り返すだけでしたのに…。彼女は自らについてこんなふうに語りました；<私って、ムカデ centipede なんです。私の国ではヤスデ millipede っていうんですけどね・・・> ここで己れ自身をムカデと認められるようになり、つまりは唯一の彼女にとっての適応というのが何百もの手を持っていてそれで手当たり次第に誰にでも何にでもしがみつ়くことで、それが自分なんだというわけですが、彼女はここから心の内側に‘思いを孕む’ことの出来る人としての一歩を踏み出したということになります。

或る月曜日、彼女は次のような夢を語りました：或るご婦人のお宅を訪問し、彼女が2人の子どもたちと一緒にのを見つけました。彼らは教会へ一緒に行く事になっていて、彼女自身の2人の子どもたちもどうやらそこに居たもようです。それからそのご婦人は彼女に、彼ら4人の子どもすべてを連れて出てゆくようにと言ったのです。それは週末見た夢であり、しかし‘4人の子どもたち’というのが真実何を意味しているのか、私はさらなる連想に委ねるしかありませんでした。4という数字は他の夢にも繰り返し出てまいりました。その後しばらく経って、私が彼女の語った或ることに関連づけて<吸血鬼のように食いついて離れない sticking …>と解釈しましたら、その途端に彼女は私に、子どもどころ、帰宅した父親が部屋に入ってきたとき、彼女は駆け寄り、彼に飛び上がって抱きつき、両腕と両脚を彼のからだに巻きつかせ、そのままへばりついて、下ろさせまいとしたという話を語ったのです。そこでようやく我々はその夢について、さらには‘4人の子どもたち’とはほんとうのところ何を意味していたのかを理解するに至ったこととなります。

そこで、これ迄述べてまいりましたタイプの困難を抱える患者の分析に関連して、その技術的問題について敢えて次のようなコメントを述べておきたいと考えます。こうした自我強度の問題性、二次元性、付着的同一化、そして二次的皮膚の形成といったものは無意識の深層にあり、それはごく早期の前言語期に基づいているわけであります。こうした理由から、そしてそれらに伴うところの、行止まり the dead end、奈落の底への墜落、溶解化、いのちが漏れ出る life-spilling-out といった、さまざまな崩壊感 catastrophic anxieties からしても、それらが転移の分析的な精査 scrutiny 上に問題として浮上してくることは滅多にないといえましょう。もしも治療セッティングが極めて厳密で、セッションの継続性が守られ、技法もまた一貫しているのでないとしたら、おそらく無理であります。分析患者が転移において十分に抱えられていると感じられているときにのみ、セッションの中で提示される資料は精確で吟味に値するほどに分離的葛藤 the separation conflicts を反映し始めるのであります。そうした保証の無い場合ですと、転移の分裂、そして分離に直面しての依存性の行為化 acting out が生起し、それゆえに情動性は退歩を余儀なくされ、分析的検証を挫くわけであります。周知のメカニズムに飛びつき、性急に結論付けることは避けねばなりません。それらがたとえ証拠として明らかであったとしても、患者側のアプローチからして、経験が繰り返されるのを待ち、そこに或る種のパターンが浮き彫りにされ、そうして患者の意識が覚醒されるまで時を稼ぐのがむしろ有利といえましょう。

こうした患者との分析作業、またそれと並行しての乳幼児観察の結果から、私はさらに、二次元

性および付着的ともいえるしがみつきの関係性というものが、皮膚と皮膚 skin-to-skin と同様に、眼および耳でもしがみつ傾向があり、それがために或る程度の‘受け身性 passivity’をもたらすことになり、すなわち人生に対して参加する態度というよりも得てして‘傍観者’になりがちになるといった他の特徴をも知るに至ったのであります。これと同じことが、「二次的皮膚形成のタイプ」にも付け加えられましょう。ソニヤの分析のその後の経過から、自己コンティンメントの‘二次的皮膚の試み’といった基本的に不満足ともいえる性質について、極めて有意義な洞察が得られました。復活祭の休暇中、彼女の母親は抑うつ的なブレイクダウンに陥り、入院治療を要することとなり、それでその間しばらくソニヤは週3回しかセッションに来れないということが続きました。母親の退院後、再び彼女を連れてきた初日に、セッションの終わりにソニヤはセラピストの親指を固く手に握って、彼を母親のところへと連れてゆき、そうして彼にしがみつ恰好で、母親がまた以前のように、彼女を翌日のセッションにも連れてきてくれるのかと尋ねてもらったということがありました。この親指へのしがみつき、そして尋ねることができたということは、彼女がかつて口に水を含ませ、セラピストから母親へと恰もなんらギャップ(間隔)など無いかのように乗り換えできたのと比較しますと、随分と進歩したことは明らかであります。事実、彼女がかつて手でループ(輪)を作ったり、荷車の車輪を回すことによく熱中していたわけですが、もはやそうしたことを致しません。今度はむしろ寝椅子の下からシンク(水屋)へと繋がる‘トンネルづくり’に熱中するようになってゆきました。シンクに辿り着くやそこで水を口にしながら、彼女は今や自分が小さな赤ちゃんであり、‘内側’へ入ってゆけるのだし、だから飛べるとばかり思い込んでいて、でも本当は唯羽をバタバタさせるだけの‘お馬鹿なアヒルさん a stupid duck’なんかじゃないのだということを説明しております。ここで「車輪の如き付着的同一化 the cartwheels adhesive identification」は断念されており、それが今や自分から隔たった対象 an interval object の摂り入れ及び投影同一化に取って代わられたものと考えていいでしょう。

討議及び総括

われわれにとって馴染みのある分析的プロセスの乳幼児期の発達背景について、すなわち投影および摂り入れ、それに防衛的な操作 defensive operations などですが、分析以外でも他の方々が興味を覚えてくださっております。**Phyllis Greenacre** は、さらに面白いアイデアを提唱しております。彼女の言うところの《早期の個体発生的に生じる有機体の防衛及びそれらの成熟した自我の防衛のメンタルなメカニズムへの変容 the early ontogenetically appearing organismal defences and their transformation into the mental mechanisms of defence of the matured ego》であります。**Eugenio Gaddini** は、同一化が起こるプロセス形成において、特にプリミティブ(原初的)な模倣もしくはものまね(擬態) mimicry の果たす役割について注目しておられます。私自身は、乳幼児の身体・自我 body-ego が己れ自身を抱えんとする、ごくプリミティブ(原初的)なプロセスを跡付けようとしたわけですが、それらは‘家族の中での母親そして子ども mother-and-child-in-the-family’共々に形づくられてゆくものといえましょう。そこで狙いとされましたのは、投影、摂り入れ、そして分裂、そして理想化といった心の操作に至るにはどのようなステップが必要とされるかを論究することでありました。

パーソナリティにおける‘早期のコンテインメント early containment’の欠陥は、極めて夥しく、紛れもない事実として歴然としている場合もありましょうし、もしくは微細で何ら目立たないかも知れません。それは見る人に拠ってもその立場に拠っても異なると言えましょう。しかしながら私としましては、このような障害を抱えている場合には、発達のあるゆる進展は得てしてよりいっそう事態を困難なものとし、その結果はよりいっそう不確実な色合いを帯びてゆくということを示唆したいと考えます。虚空へと投げ出されるといったカタストロフィ(終末的)な不安感、行き止まりで万事休すといった感覚は、変化が要求されるあらゆる事態において浮上するのは必至でありましょう。それがゆえに深刻な保守性 deep conservatismを発生させますし、同じであること samenessに固執し、そのために外界からの保証そしてサポートを得んと躍起になることになるわけです。このことは、‘二次的皮膚形成’がその人の性格的な際立った特徴である場合には、言うなれば仮面で覆われた状態ですから、傍目にはさほど気づかれないかも知れません。しかしストレス下において突然その仮面が剥がされてしまいますと、どんなにうまく適応しているように見えたとしても、その内側に傷痕の残るパーソナリティが顕在化するのであります。私の経験から申しますと、こうした人が分析患者である場合には、決して焦らず手堅くコンテインされたプロセスを必要とするでしょうし、そこでそれぞれの成長へ向けて、かなり長期に亘る、忍耐強いワーク・スルー working through が不可欠とされるだろうというふうに考えております。

※原典；

Further Consideration on the Function of the Skin in Early
Object Relations, by Ester Bick
British Journal of Psychotherapy, 2(No. 4) :1986 p. 292-299

尚、この論文は下記の出版物に再録されております。

《Surviving Space —Papers on Infant Observation;
Essays on the centenary of Ester Bick 》
edited by Andrew Briggs, Karnac 2002
